

海外からの研修学生の来訪と本学からの派遣 2016 年後期から 2017 年前期までの展開

成田 有吾^{1,8)}, 竹内佐智恵^{2,8)}, 児玉 豊彦^{3,8)}, 武田 佳子^{4,8)},
宮田 千春^{5,8)}, 服部 由佳^{6,8)}, 石本 恭子^{7,8)}, 小瀬古 隆⁹⁾

**A report on activities and effects of overseas students' exchanges
at the School of Nursing, Faculty of Medicine, Mie University,
during the second semester in 2016 and the first semester in 2017**

**Yugo NARITA, Sachie TAKEUCHI, Toyohiko KODAMA, Yoshiko TAKEDA,
Chiharu MIYATA, Yuka HATTORI, Yasuko ISHIMOTO and Takashi KOSEKO**

Key Words: International exchange activity, Chiang Mai University, Catholic University of Applied Sciences Freiburg

2016 年前期分までの海外から本学への研修学生の来訪とその後の展開については三重看護学誌前巻で報告した(成田・児玉・竹内・武田・平松・福録・山田, 2017)。その後, 2016 年度後期に, ドイツ, フライブルク・私立カトリック応用科学大学から 4 名の研修生と教員が, また, 2017 年度前期には, タイ, チェンマイ大学看護学部から 7 名, およびカトリック応用科学大学から 8 名が本学看護学科を訪問した。一方, 本学からも 2016 年度後期に 4 名および 2017 年度前期に 6 名の学生と教員がカトリック応用科学大学を訪問した。この間の経緯と展開を含め, 資料として紹介する。

1. ドイツ, フライブルク・私立カトリック応用科学大学 Katholische Hochschule Freiburg (Catholic University of Applied Sciences Freiburg)

ドイツ南西部, フライブルク市にある, 私立カトリッ

ク応用科学大学には, 四日市市ご出身のヘルビク広江尚美先生が国際交流センター長として活動されている。三重大学との交流は, 教育学部に始まり, 2014 年 6 月 11 日には医学部との学部間協定が締結されたことに始まる。カトリック応用科学大学に医学科はなく, 実質的には看護学科との協定と理解されている。三重大学からは, これまでに 4 回の短期研修(1 週間以内)が行われ, 看護学専攻長の畑下教授はじめ, 数名の看護学科の教員が看護学部生, 大学院生を引率し, カトリック応用科学大学との交流を深めてきた。

2016 年度 後期の来学 :

今回, 2016 年 12 月 18 日から 12 月 24 日まで 2 名のカトリック応用科学大学生と, 2 名の同大教職員(エルケ デュッシュ教授, ヘルビク 広江尚美 国際交流センター長)が, 三重大学と紀南病院を訪問した。彼らは医療保健管理経営(B.A. Health Care Management)

-
- 1) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 実践基礎看護学分野
 - 2) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 成熟期看護学分野(成人看護学)
 - 3) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 精神・ストレス健康科学分野(精神看護学)
 - 4) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 成熟期看護学分野(がん看護学)
 - 5) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 看護教育学分野(看護管理学)
 - 6) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 成熟期看護学分野(老年看護学)
 - 7) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 地域看護学分野
 - 8) 三重大学医学部看護学科 国際交流委員会
 - 9) 三重大学医学部附属病院 看護部

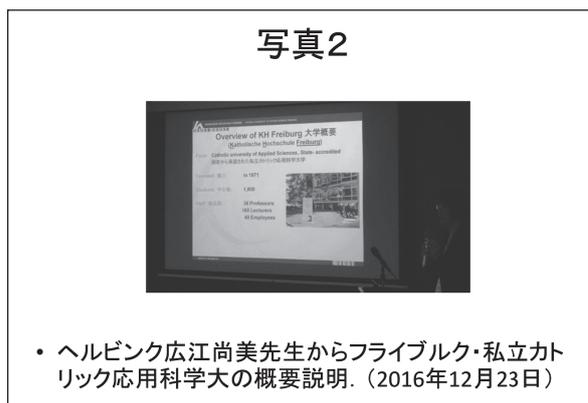
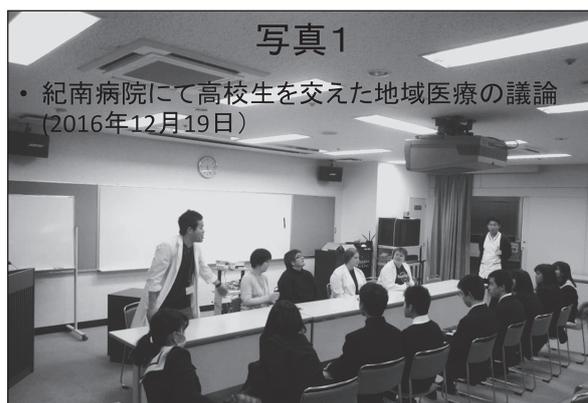
学士コースに在籍し、大学での講義等学業のスケジュールのないときには看護師として就労している。この学生たちは、2016年前期に3か月間三重県に滞在した学生たち（三重大学や県内の医療施設と交流を持ったインターンシップ）の情報を得（成田，他，2017），さらに、三重大学から2016年11月20日～24日に、看護学専攻博士前期課程学生ほか4名が同大学を訪問したことを受けて、来日を希望した。同大学生は卒業論文（bachelor thesis）をまとめる必要があり、テーマ選択に本邦での経験も視野に入れていた。紀南病院（三重県御浜町阿田和）では廣畑看護部長はじめ多くの職員の協力を得て、過疎地域を含めた医療提供システムを見学した。12月23日には三重大学でパネルディスカッションを開催した。2016三重大学地域拠点サテライト企画「地域医療と医療資源のマネジメントー日独に共通する諸問題と解決策に向けて」と題したこの企画には、学内外から、近隣の高校生を含む37名が参加した。プログラムと開催後の調査票集計内容を表1に提示した。このテーマに対する双方の関心は高く、交流の継続と、卒業研究等での相互協力が提案された。引き続き、2017年度前期の活動に繋がった。

2017年度前期の来学：

カトリック応用科学大学から看護学専攻学部学生5名が、2017年5月に来学した。来学の目的は、本学学生や本学附属病院看護師との交流に加えて、看護学士を目指す5名が、ゼミ指導教員ハウケシューマン教授の指導のもと、シミュレーション（看護）教育と学校看護師（school nurse、本邦の養護教員に相当）の活動を見学し、さらに、医療経営学的側面から地域医療の知見を得ることにあった。昨年度、本学が受け入れた同大学インターンシップ学生の体験から、医療経営、医療施設管理は本学訪問の重要な目的の一つとなっていた（成田，他，2017）。

1) 先ず東京に到着。多摩大学での研修

2017年5月20日（土曜日）に学生5名のみが先に来日し、東京の多摩大学、長英一郎教授の指導のもと、医療経営管理についての指導と病院および高齢者デイケア等を見学した。次いで5月24日（水曜日）夜には、新幹線と近鉄を乗り継いで、三重県志摩市に移動した。翌5月25日より、鳥羽市立長岡診療所長鈴木孝明先生の指導により、地域医療の実態、地域住民との交流、地域基幹病院である県立志摩病院との連携の様子など、さらに、相模地区の小学校、中学校での養護教員の活動を見学した。



2) 本学学生が志摩まで出迎え、交流しながら津まで帰還

5月27日（土曜日）本学、学部学生8名が、大学の小型バスを利用して、滞在先の志摩、相模まで出向き、フライブルクからの学生5名と合流した後、各地を見学しながら津まで帰還した。鈴木孝明先生のご案内で、県立志摩病院の外来棟を見学、地域医療と志摩病院の活動の解説を受けた。志摩病院の見学ののち、伊勢志摩サミット記念館を訪問した。同記念館は近鉄賢島駅2Fに設置され、見学前日の5月26日14:00にオープンした施設で、前年開かれたG7伊勢志摩サミットでの記録や供用された機器、テーブル、机に触れることができた。双方の学生にとって世界の中での三重、志摩を認識できる機会でもあった。

伊勢志摩サミット記念館のあと、鳥羽市の海の博物館を見学した。貴重な民族資料の展示と海を中心とする災害、公害などの情報が掲示されており、詳細を学生が説明しながら見学した。海女の活動に関して、英語でのビデオによる画像解説を受けた。「鳥羽・志摩の海女漁の技術」のユネスコ無形文化遺産登録に向けた取り組みについての理解も進んだ。津に戻った後、宿舎では、三重大学の学生は、ドイツ学生に必要な書類記載や必要な情報提供を行い、宿泊環境に慣れることへの支援を行った。

写真3

・伊勢志摩サミット記念館で（2017年5月27日）



写真4

・三重大学馬術部にて(2017年5月28日)



写真5

討論:シミュレーション教育、学校教育と看護。
司会:シューマン先生とデュッシュ先生
(2017年6月2日)



3) 本学での交流と展開

5月28日(日曜日)10:00から12:00まで、学内のクラブ活動(馬術部、硬式テニス、陸上部、野球部、よさこいダンス、自動車部等)の練習風景の視察、海岸への散策を行った。来学者のひとり、ゲザシュワンツさんは、6歳から20年間、馬術に親しみ、ドイツでは、今でも自らの馬を地域のクラブに預託して、連日、馬の世話と障害飛越などの練習に励んでいることを語った。

5月29日(月曜日)10:00~12:00、本学看護学科で、ドイツからの学生、教員に対してオリエンテーションおよび看護学科の概要説明を行った。英文で記載されたOutline of Mie University 2016をもとに三重大学の情報に触れた。ドイツからの学生たちは、三重大学の4つの力に関する教育理念と、近年推進されているアクティブラーニングに関する情報や留学生の情報に関心を寄せていた。教職員らは、大学の情報を詳細に網羅して、学内外へ教育に関する情報を提供しているシステムに関心を寄せた。国際交流を推進するにあたって、自身の学校の事情を適切に整理し公開することの重要性を互いに認識する機会となった。昼食は、本学学生と交歓しながら生協でとった。

13:00からは三重大学医学部附属病院の院内学級を見学し、担当の教員、附属病院看護師より、状況の説

明を受けた。院内の見学を病院看護部担当者の説明を受けながら進め、15:00からは、同院スキルズラボを見学し、櫻井洋至病院教授から説明を受けた。school nursing と simulation 教育について、本学担当者との議論の時間となった。

5月30日(火曜日)10:00三重大学教育学部附属中学校を訪問、副校長 東俊之先生、教頭 井上久先生、養護教諭 竹田結貴先生から、学校教育における看護職の立場についての状況説明を受けた。竹田先生は三重大学医学部看護学科第9期卒業生で看護師の資格も有する養護教諭であり、今回の「school nursing」に関して貴重な情報源となった。

フライブルク・カトリック応用科学大学の一行は14:00津駅発のJR特急ワイドビュー南紀にて新宮へ向かった。現地では、紀南病院看護部長 廣畑静氏が紀南病院を中心とする2日間のプログラムを担当した。

廣畑部長と森本真之助医師の案内で、一行は、5月31日(水曜日)に紀宝町浅里地区を訪問した。浅里地区は、にほんの里100選のひとつに選ばれている、熊野川沿いに非常にのどかな里山が、飛雪の滝に隣接するかたちで展開している。しかし、同時に2011年9月台風12号で三重県内でも一番被害が大きかった地区でもある。想定外の水害で、斜面崩落も加わり、甚大な被害を受けた。地域住民の方々から直接、被害の状況や復興活動の現状を聴く機会となった。通訳には都賀氏、森本医師などがあたり、言葉の壁を越えて理解が進んだ。

6月1日(木曜日)ドイツからの一行8名は、紀南病院の地域医療への取り組みや、過疎地に位置していても世界に目を向けようとしている態度を感じて津に戻った。地域の医療ばかりでなく生活全般を支える紀南病院の活動と浅里地区の訪問は強く印象に残っていた。

夕方18:30~20:00、看護学科3Fグループ学習室で一行8名と本学看護学科学生と教員は、学部レベルにお

ける bachelor thesis (卒業研究) での共同研究の可能性について議論した。言葉の壁はあるものの、参加者はさまざまな工夫についての示唆を得た。

6月2日(金曜日)13:30から16:45まで、附属病院12F三医会ホールで、第二回日独パネルディスカッションを行った。この取り組みは、三重大学地域拠点サテライト東紀州サテライトの活動事業活動、三重大学大学院医学系研究科看護学専攻の「大学院セミナー」として指定された。参加者は計23名で、看護学科(学部生1名、大学院生6名、教員10名)、医学科からの教員(2名)、医学科学生(1名)、一般(3名)であった。ヘルピンク広江尚美先生からのフライブルク・カトリック応用科学大学の状況に関する解説(日本語)に続いて、ハウケシューマン教授から看護学の人材育成におけるシミュレーション教育、5名の学生から今回の学習点と学校での看護師(養護教育)、エルケデュッシュ教授から看護教育における管理運営と研究管理の話題提供(合計1時間)で始まった。シューマン教授は、皮膚科医で、同大学の看護学科では、解剖・生理、臨床医学も担当している。続く討論の時間には、さまざまな話題が展開し、日独ばかりでなく、米国の教育事情をよく知る教員や外部一般参加者からの発言が関心を集めた。ドイツの看護教育においてOSCEが浸透している反面、職種間連携において「独自性」の壁がある様子が提示されるとともに、看護師でもある学生からは看護師が自身の看護の仕事の明確なアイデンティティが確立しきれていない思いが語られた。

この時点で、次のコンタクトとして、2017年9月末の三重大側からのフライブルク訪問、さらに12月には、同大学からの再度の訪問と第3回の日独パネルディスカッションが想定されていて、今後に向けての期待や意見が提示された。

2017年度三重大学からの訪問：

三重大学からの6名が2017年9月23日から9月29日までフライブルクを訪問した。宮田千春准教授と学部学生3名(4年生2名、1年生1名)、附属病院看護師1名、同職員1名の計6名が、カトリック応用科学大学での教職員および学生との交流、ならびに関連施設(含、フライブルク大学附属病院)見学を行い、10月1日に帰国した。短時間の訪問ながら、4年生は事前にメール等でのやりとりを経て、卒業研究での情報収集も試みた。

2. タイ、チェンマイ大学

Faculty of Nursing, Chiang Mai University

1) さくらサイエンスプランとしての訪問

タイ、王立チェンマイ大学看護学部からの学生チームが、今年度はさくらサイエンスプラン(SSP)の一環として、2017年5月18日から24日まで、三重大学を訪問した。同大学は、本学医学部看護学科の提携校である。両校は、4年前から年に一度、相互に1週間の研修を受け容れてきている。

第1日：5月18日(木曜日)16:30、タイ、チェンマイ大学看護学部からの一行は、三重大学看護学科に到着した。SSP(Sakura Science Plan)開始式兼オリエンテーションでは担当者と附属病院看護部長からの歓迎の挨拶を受けた。

第2日：5月19日(金曜日)、07:50に看護学専攻長畑下教授の挨拶のあと、紀南病院へ移動、10:40到着。紀南病院では、院内の概説、地域の医療供給体制と少子高齢化が進む地域の問題点などの解説を受け、遠隔地でもIT機器を駆使して対応する様子を見学した。同院職員との昼食では、タイ・本邦の共通する問題点、タイでのナース・プラクティショナーの話題など多岐にわたって議論した。13:00、紀南病院看護部 廣畑 静部長と森本真之助 医師とともに、紀宝町浅里地区に移動

写真6

さくらサイエンスプラン(SSP)開始式
三重大学 看護学科 (2017年5月18日)



写真7

左：浅里生活改善センターでの地域住民との意見交換会。南牟婁郡紀宝町浅里地区
右：地域住民に必要な災害時の対策を解説する森本真之助医師(紀南病院、内科)
(2017年5月19日)



写真 8



・ ホンダ歩行アシスト, 装着中のチェンマイ大学からの男子学生@ウェルフェア 2017, 会場のポートメッセなごや (2017年5月20日)

写真 9



・ 三重大学医学部附属病院, スキルズラボでの研修, 櫻井洋至先生からシミュレーションモデルでのエコー操作の指導 (2017年5月22日)

した。浅里地区は、にほんの里 100 選のひとつで、2011 年台風 12 号により甚大な被害を受けたことは前述した。地域住民から直接、被害の状況や復興活動の現状を聴き、地域の医療ばかりでなく生活全般を支える紀南病院の活動は全員の印象に残った。

第 3 日：5 月 20 日（土曜日）、第 20 回国際福祉健康産業展（ウェルフェア 2017, ポートメッセなごや）が SSP のプログラムに組み入れられた。そこでは、多様な機器展示があり、自動車関連企業の展示スペースが注目された。ホンダの、腰部に装着する運動補助機器の体験コーナーでは、学生も試着して有効性を体験できた。

第 4 日：5 月 21 日（日曜日）、三重県立博物館および県立総合文化センターを訪問した。三重県の地質、中央構造線と火山史、古生物から現代までの生物、文化、歴史などを学習した。16:00 から、看護学科棟の調理実習室にて共同して作った軽食をとりながら看護教育の様子や将来について参加者相互に議論した。

第 5 日：5 月 22 日（月曜日）、三重大学環境情報科学館および三重大学附属図書館を訪問、環境への取り組みを学習した。附属病院手術室では最新の機器とロボット手術について研修した。看護部のスタッフとの意見交換では、タイ、日本の差違について見識を深めた。また、引率の Dr. Usanee Jintrawet の夫君（チェンマイ大学農学部長 Attachai Jintrawet 教授）の友人である本学生物資源学研究所長の梅川逸人教授にも面談した。

第 6 日：5 月 23 日（火曜日）、鈴鹿医療科学大学を訪問した。HAL Pit ではロボット装具、HAL について学習した。筋肉の動きを感じて補助するのではなく、表面電位の変化を感知して、筋肉が動く前に機械がアシストする様子を実際に装着体験できた。リハビリへの応用と生体のフィードバック機構を症状改善や進行防止に利用している様子を理解した。

期間中に、三重大学医学部附属病院、スキルズラボ

(MiT: Mie University Institute of Technical Skill Education) での研修も行った。各種、シミュレーション機器により医師ばかりでなく看護師もトレーニングに活用している様子を体験した。

第 7 日：5 月 24 日（水曜日）、午前を総括準備に宛て、午後に三重大学学長を訪問し、SSP の学習結果などの質問を受けた。その後、看護学科にてタイ側の学習成果発表と総括を進めた。18:00、送別会を開催、多くの学生、教員の参加を得て、SSP の修了証書とピンバッジ贈呈式を行った。

第 8 日：5 月 25 日（木曜日）、朝、タイにむけて、中部国際空港から所定の便で帰国した。翌日 12:00 までに全員からの無事帰国を確認した。

なお、2017 年度の三重大学からのチェンマイ大学訪問は年度末の 2 月末から 3 月上旬を予定している。

2) 学生の交流から教員の共同研究に向けて

2016 年度に来学したピヤヌート・シュート准教授 (CMU) と本学の児玉豊彦講師の間で、看護学科教員の共同研究が開始されている。テキストメッセージを用いた妊婦支援についての研究で、三重大学側では児玉講師が中心となって「チーム BEYOND」を立ち上げた。このようなテキストメッセージを用いた介入研究

写真 10



・ チェンマイ大学と三重大学 看護学科教員の共同研究。テキストメッセージを用いた「チーム BEYOND」を立ち上げた児玉講師(三重大)とシュート准教授 (CMU)。研究が進行中

の国際比較研究は、世界でもこれまでに例がなく、今後の進展に期待している。

なお、タイおよびドイツとの交流は、三重県の「みえ国際ウィーク 2017」の活動の一環として、三重県からの認定を受けた（三重県，2017）。

本学を訪れた外国人学生達は積極的に学ぶ姿勢を示し、本学の看護学生ならびに教員らにとっても大きな刺激となっていた。また、このような国際交流を通じて、改めてわが国の医療の長所や問題点に気づいたことも多かった。今後も国際交流活動は重要な取り組みであり、継続による強化と深化が期待されている。目的達成には関係者全体の英語能力の向上、これまでの取り組みの経験知の活用と継承が課題である。

謝 辞

SSP に対してのご支援とご指示をいただいた国立研究開発法人科学技術振興機構 中国総合研究交流センター日本・アジア青少年サイエンス交流事業の関係各位、ならびに三重大学での経理、報告書等にご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

また、本学とドイツ、フライブルク・カトリック応用科学大学への相互訪問では、ドイツ学術交流会（Der Deutsche Akademische Austauschdienst : DAAD）よりご支援をいただきました。申請と交付にあたりご尽力いただいた関係各位に感謝いたします。

利益相反

SSP の資金援助を国立研究開発法人科学技術振興機構から受けた。また、本学国際交流事業支援経費ならびに看護学科経費から予算に則って資金援助を受けた。他に本報告に関して申告すべき COI はない。

文 献

三重県. みえ国際ウィークにおける取組のご紹介. <http://www.pref.mie.lg.jp/KOKUSEN/HP/72171045042.htm> (accessed 10th October, 2017)

成田有吾, 児玉豊彦, 竹内佐智恵, 武田佳子, 平松万由子, 福録恵子, 山田奈央 (2017). 海外から本学への研修学生の来訪とその後の展開 2016 年前期. 三重看護学誌. 19: 35-40.

キーワード：国際交流, チェンマイ大学, カトリック応用化学大学

表 1

2016 三重大学地域拠点サテライト企画

「地域医療と医療資源のマネジメンター日独に共通する諸問題と解決策に向けて」

1. パネルディスカッション&講演

日時：2016年12月23日（金，祝）13:30～16:10（13時受付開始）

場所：三重大学医学部附属病院 外来棟 5F 大ホール

パネルディスカッション

ヘルピンク 広江 尚美 (Naomi Hiroe-Helbing) 先生

（フライブルク・カトリック応用科学大学 国際交流センター）

廣畑 静氏

（紀南病院 看護部長）

伊藤 真実 看護師

（三重大学附属病院 ICU 看護師・三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻 博士前期課程）

竹内佐智恵 先生

（三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 准教授）

今井 寛教授

（三重大学教授 附属病院 救命救急・総合集中治療センター長）

講演

“Future for Long Term Care and Challenges in Healthcare Management”

「将来の介護とヘルスケアマネジメントにおける挑戦」

エルケ・ディッシュ 教授 (Economy in Social and Health Care)

(ドイツ, フライブルク・カトリック大学 医療マネジメントコース)

参加者 37名

フライブルク・カトリック応用科学大学	4
三重大学医学部	3
三重大学本部等	2
三重大学医学部附属病院 看護部	3
三重大学大学院医学系研究科 (大学院生)	2
三重大学医学部看護学科 (学部学生)	4
関連病院 / 関連医療機関	2
近隣 高校生 & 教諭	8
三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 教員	9

評価

	1) フライブルク・カトリック大学について	2) ドイツについて	3) 海外での研修や留学について	4) 三重県の医療や看護を盛り上げることの重要性について	5) 地域医療の活性化のための紀南病院での取り組み	6) 介護問題と問題解決への取り組み
人数	13	13	17	20	21	16
n=37のうちの関心者率(%)	35.1	35.1	45.9	54.1	56.8	43.2
n=29のうちの関心者率(%)	44.8	44.8	58.6	69.0	72.4	55.2

コメント	カテゴリ	テーマ
英語で難しかったですが、ドイツの現状が少し理解できました。 現在の日本で起こっていることは他の国とも共通であると興味深く聞くことができました。 非常に高度な内容だったのでわからない部分も多かったですが、海外の医療の現状を知ることができた、とても貴重な時間でした。 このような貴重なシンポジウムに招いていただき、本当にありがとうございました。 貴重なお話をありがとうございました。参加したことはとてもいい経験になりました。日本国内のことばかりでなく外国にも目を向けるきっかけになりました。 ドイツも日本も同じような問題を抱えていると思った。 介護の問題に関して特に関心が高まりました。学校の授業で日本はA1ごとが少なく就職しづらいと言われてるけど、実は介護の仕事などは人気がないということは知っていました。しかし、東南アジアの人からは日本が人気なのに資格をとるための試験が日本語のためにあまり通らないみたいです。ヨーロッパの国々における外国人が介護で働きたいのに資格をとるのが難しいという事情は日本と同じだと思いました。 学生にも参加しやすいような配慮がうれしかったです。学生からの現状が聴けたことも具体的にわかり安かった。介護保険がドイツとオーストリアを手本にして開設されたことを知って驚いたのと同時に他国との意見交換や情報共有が大事であると思った。 この企画で日本のなかのしかも三重県の三重県の医療のことしか考えていませんでしたが、ドイツの現状の医療を知り世界に目を向けるいい機会となりました。 この企画で、僕はドイツの特色や地域医療、そしてドイツ以外の他の国のことも聞いてみたいと思いました。 大学に入ったいろいろな国に留学してみたいと思いました。そしてそのためにも今英語の勉強をもっとしないとだめだなと思いました。 違う国の違う状況を語り合うことは楽しく自国の制度を振り返るきっかけにもなるのでよい取組だと思います。 ドイツでの介護の現状がきけて本当にドイツと日本の似た現状を知れている可能性を聴けてよかった。ドイツ研修での自分の疑問もかなり解消できた。 ドイツの現状を知ることができました。また多くのディスカッションを聞かせていただき勉強になりました。 ドイツの看護教育で経済学、哲学があるのが驚きました。日本の教育のこともよく知りませんが・・・ 地域医療という点がとても興味深かったです。 このような企画があれば今後も積極的に参加したい。国際交流は外国だけでなく日本でもこのような企画があればできるものなんだと思いました。 三重の田舎にいても国際交流ができて楽しかったです	他国への関心の深まり	視野の広がり
	看護教育への関心の高まり	
	地域医療への関心	
	三重県内で行われた国際交流に感心	